昭和文学私論

平野　謙

毎日新聞社

昭和文学私論

昭和五二年三月一〇日　第一刷
昭和五二年六月二〇日　第二刷

著　者　平野　謙

編集人　桑原隆次郎

発行人　伊奈一男

発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四六〇　名古屋市中村区堀内町

印刷　中央精版
製本　大口製本

© Ken Hirano printed in Japan 1977

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和文学私論　目次

昭和初年代の潮流

横光利一の初期作品　11
雑誌《文藝時代》について　18
岸田国士と犬養健　25
川端康成と《文藝時代》　33
稲垣足穂のこと　40
江戸川乱歩の初期短篇　47
『蓼喰ふ蟲』をめぐって　54
谷崎潤一郎の再婚　61
潤一郎と荷風　68
荷風の女性関係　74
『濹東綺譚』の方法　81
川端康成の『禽獣』　88
『智慧の環』と『機械』　95
川嶋至の『禽獣』論　102
宇野浩二の錯乱　109

『知られざる傑作』の反響 116
広津和郎のマスコミ論 123
文学者の恋文 130
寺岡峰夫のことなど 137
岡田三郎の恋愛事件 144
佐佐木茂索の長篇 152
同伴者文学のこと 158

昭和十年前後の潮流

能動精神について 167
横光利一の『純粋小説論』 174
純文学余技説の提唱 181
中村光夫の登場 188
昭和十年度の《文学界》 195
亀井勝一郎の処女評論集 202
島木健作の初登場 209

島木健作の『盲目』 216
中野重治の島木健作評価 220
『再建』と『生活の探求』 231
『囚はれた大地』の批評 238
昭和九年の新人群像 245
芥川賞の新設 252
太宰治の錯乱 259
太宰治の贖罪意識 266
川端康成の自作自解 274
川端康成と龍膽寺雄 278
二十世紀小説の意味 285
伊藤整の私小説論 292
石坂洋次郎の『麦死なず』 306
阿部知二のデビュ 313
小林秀雄と正宗白鳥の論争 323
広津和郎の散文精神論 333

昭和十年代の潮流

日中戦争勃発前後 339
火野葦平登場 343
捕虜の取扱いについて 350
ペン部隊のこと 357
表現の自由の問題 364
中野重治の執筆禁止 371
戦時下の生産文学 379
北原武夫の登場 393
高見順の『文学非力説』 407
文学と新体制 414
近衛新体制の竜頭蛇尾 418
日本文学報国会の創立 422
窪川鶴次郎の苦渋 426
里見弴『十年』のこと 437
『近代の超克』をめぐって 441

中村光夫の問題提起 445
亀井勝一郎の問題点 449
戦時中の同人雑誌 453
《現代文学》と大井広介 461
対照される埴谷と私 465
杉山英樹のこと 469
戦時下同人雑誌の結末 473
林房雄のこと 477
尾崎一雄の『あの日この日』 481
あとがき 490

装幀　長峰八州男

昭和文学私論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和初年代の潮流

横光利一の初期作品

これから私の見聞してきた文学史的回想をもとにして、昭和文学史あるいは現代文学史の一側面をしばらく本欄（毎日新聞夕刊学藝欄）に連載したいと思う。実は私には『昭和文学史』という小著があって、類書のすくないままにいまも少部数ながら版を重ねているのだが、季刊《批評》同人諸君がつとに批判したように、現代文学史としては一種の偏向を持っていた。それは一口にいってプロレタリア文学偏重ということである。私自身が昭和初年代のマルクス主義文学運動に決定的な影響をうけたという個人的痕跡のために、そういう結果になってしまった。それはそれでやむを得なかったと思ってはいるが、ここでできれば私なりの偏向修正を試みたいのである。昭和文学史の一側面を描きたい、とはそのことをも含ませたい希いにほかならない。いわば私なりの昭和文学史の読みなおしといってもいい。毎月ひとつのテーマを上下二回に分載するという形式で、しばらく気ままに書きついでゆきたいと思う。文藝時評同様に、ご愛読たまわれば幸いである。

昭和文学史あるいは現代文学史を私なりに読みなおすとなれば、やはり最初に私の前にすわる人は横光利一だ。現在、若い読者にどの程度横光利一が読まれているか、一向不案内だが、昭和文学史の劈頭を飾る人は横光利一以外にない、というのがむかしからの私の固定観念である。文壇的処女作『日輪』から『花園の思想』あたりまでの数年間を、よくわからないながらに、私は愛読したものである。また、私は

大正十三年十月に創刊された雑誌《文藝時代》の定期購読者だった。そういう初期の横光利一については、すでに一度書いたこともある。

しかし、初期横光利一をめぐる画期の事件として、昭和三十五年五月に百七十枚の遺作『悲しみの代價』が公表されたことをあげたい。雑誌《文藝》の臨時増刊『横光利一読本』において、川端康成の適切な解説とともに、はじめて遺作『悲しみの代價』が発表されたのは、初期横光利一のイメージに重大な資料をさしくわえたことになる。その点をとらえて、新しい横光利一論を書いた批評家に故日沼倫太郎がいるが、『悲しみの代價』を横光利一の原点として論じた日沼倫太郎の横光利一論について語る前に、まず私は川端康成の解説に触れておかねばならない。

川端康成は、遺作『悲しみの代價』を公表するに際して、その発表をためらう理由を四つほどあげているが、「最もおそれた」のは、「事実に近い小説、あるひは横光君の私小説として読まれる危険」ということだった。あとでもう一度触れるつもりだが、『悲しみの代價』は裏切られた良人いわゆるコキュの哀しみをテーマとした小説である。川端康成の推定によれば、『悲しみの代價』は大正十年以前の執筆にかかるものであり、横光利一は大正十二年十月に最初の結婚をしている。したがって、『悲しみの代價』が私小説であり得ようはずもないが、しかし、わが国の濃密な私小説的風土のなかで、現実に横光利一がコキュだったと誤解されることを、川端康成は嫌ったのである。

川端康成が『悲しみの代價』の発表を躊躇したもうひとつの理由は、おなじ題材をつかって、すでに横光利一が『愛巻』(のち『負けた夫』と改題)という小説を大正十三年十一月号の《改造》に発表しているからである。ただし、『愛巻』の材料は『悲しみの代價』の前半までであり、全体として後者の「張りつめてゐる強激、沈痛、真率」が前者にあっては「改悪」されている、というのが川端康成の意見だった。「『悲しみの代價』は多分横光君が数へ年二十五歳前のものとして、未熟不備なところも見える草稿である

けれども、これほど横光君の人間が素直に、そして切々と訴へるやうに出てゐる作品は、初期にも後期にもないと私は思ふ。だいたい作家横光君を見る場合、新感覚派時代の作品からはじめるのが通例であって、それはそれとして誤りではあるまいが、新感覚派以前の素朴な作品、私小説風な作品も横光君を知るにはなほざりに出来ないと、私は早くから考へてゐた。この『悲しみの代價』を得て、その考へがなほ明らかに強められたのは幸ひである」

ひとつの作品に作者自身の人間性が「切々と訴へるやうに」にじみでていることを、その作品のすぐれた所以とするような小説観、いいかえれば作品を通じて作者その人を知り得る「私小説風」な作柄の無視すべからざる所以を説くような小説観を、ひとつのアンチテーゼとしてここに川端康成は提出し、そういう「私小説風な作品」のなかに『悲しみの代價』も数えあげているようにみえる。これは『悲しみの代價』を私小説的に読まれることをいちばんおそれた川端康成と一見矛盾するようだが、この問題をもう一歩文学的に掘りさげたのが日沼倫太郎の横光利一論にほかならない。この作家論は雑誌《文学界》の昭和三十八年十一月号から翌三十九年一月号まで連載された力作だが、そこで日沼倫太郎は『悲しみの代價』を横光利一の原点と名づけ、その原点の一達成を『花園の思想』とみなしている。たしかにそこには独創的とよんでもいい新しい発見があった。同時に、そこには新しい発見にみずから酔っぱらった一種の文学的誇張もないわけではなかった。たとえば新感覚派の花やかな作品活動をすべて「原点逸脱」として、これをしりぞけるような。しかし、いま注意すべきは『悲しみの代價』を横光利一の原点とみなす一根拠として、日沼倫太郎が小島勗にあてた横光利一の書簡を援用していることである。

ここで小さな註釈をほどこしておけば、小島勗は横光利一や富沢麟太郎や中山義秀らが大正十年五月に創刊した同人雑誌《塔》の同人であって、のち《文藝戦線》の同人となったが、昭和八年に数え年三十四歳で亡くなった。横光利一はこの小島勗の妹君子に恋愛し、小島勗の根づよい反対にもかかわらず、大正

十二年に結婚したのだが、この夫人は早くも大正十五年に結核で若死にし、その鎮魂歌として、横光利一は『春は馬車に乗って』『蛾はどこにでもゐる』『花園の思想』など亡き夫人を女主人公とする一連の作品を書きあげたのである。日沼倫太郎はそういうあいだからの小島勗にあてた大正十一年九月ごろの横光利一の書簡を援用して、もともと小島君子がコケティッシュな女性ではなかったかと推定し、そこに『悲しみの代價』のモティーフをみている。こういう読みかたは私などもしばしば愛用したおぼえのあるもので、いつも「私小説的」なそれとして非難されるところだが、川端康成のおそれた私小説的な読みかたとは多少異なっている、といってもいいかと思う。しかし、問題はやはり『悲しみの代價』という作品自体にある。

『悲しみの代價』を川端康成は大正十年以前の作と推定し、日沼倫太郎は大正十一年ではないかと推定している。それぞれ根拠があっての推定だが、大正十一年九月に小島勗にあてた横光利一の切迫した長文の手紙と前後して制作されたのではないかという日沼説は、説としてはおもしろいが、私としては川端説に加担したい。いずれにしても『悲しみの代價』が横光利一の現実の結婚生活にさきがけて書かれた空想の作である点において、両者は一致している。さきにもふれたように、横光利一は大正十二年六月に周囲の反対を押しきって、小島勗の妹君子と結婚したが、わずか満三年ののち、君子夫人は結核のため数え年二十一歳で死亡している。

『悲しみの代價』は一種の心理小説だが、読めば誰にもわかるように、結婚生活をささえている最小限度の社会性もなければ日常性もない。主人公はどうやら大学卒業生らしいが、現在どういう手段によって日暮しをたてているのか、最後までわからない。気がむけば妻に一言の断わりもなく故郷に帰って、そのまま半月も一月も居すわっている。故郷には母親だけがいるあんばいで、彼女がまたどうして日暮しをたてているやら、さっぱりわからない。つまり、『悲しみの代價』は最小限度の日常性も社会性も捨象して、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com